

食の王道
4
人の王道

●安全でおいしい食糧を求めて

自然生態が戻った田んぼ

米

文／金丸 弘美

群馬県藤岡市の公務員の浦部夫妻が、自分たちの健康のためにと始めた有機無農薬栽培の米は口コミで広がり、個人購入から商店まで約600件の取引に拡大。田んぼは蛭やイナゴも生息し、各地から田んぼの見学や稲刈りの手伝いに現れる消費者も生まれるまでになった。

■「有機農産物」の概念が変わる！
農林水産省が準備を進めている有機農産物の検査・認証制度が2000年にできる。「有機農産物」とは化学合成農薬・化学肥料を使わず3年以上たった畑や田からの産物をいう。今後は農水省が認めた認証団体の検査を受けないと「有機農産物」の表示は使えなくなる。

有機無農薬栽培だから、茎が太く色が濃い。籾数も通常の1.5倍

田んぼを覗くと、周りの田んぼとは歴然と違う。茎が太いし色が濃い。その茎の数は少なく、ほどよい隙間があり密集して、穂は深くたれている。実つた籾も多い。実際普通であれば穂に70〜80粒なのが、110〜120粒はある。そればかりではない。田んぼには水草があふれ、雑草も目立つ。水草をかきわけると水の中には、ドジョウも泳いでいる。穂の上ではトンボが舞い、イナゴが飛び交う。最近田を借りて作り始めた貯水池の近くでは、螢さえ出てきたのである。

群馬県藤岡市の浦部農園の浦部修さん（49歳）、真弓さん（49歳）夫妻が、本格的に有機無農薬栽培に取り組んで15年。今年は無農薬改良普及所から有機栽培であることの認証も正式に受けた。

「ようやく慣行栽培（一般に作られる稲）以上の収穫ができるようになって、



農林水産省の有機農産物ガイドラインの表示がされた水田。ジャポニカ種の黒米（上）。稲刈りをする真弓さん。田の周辺はコンバインで刈れないので手刈り。メッシュ入りショートヘア、赤いつなぎが真弓さんのトレードマーク。農業だからこそ明るくしたいと言う。



自信ができた。除草剤や農薬を使わなくとも、たくさんの米はできるんです」と、修さん。

実はこの15年、無農薬有機栽培に取り組んで試行錯誤の連続だったのだ。放つ

ておいた雑草が繁殖し、稲が押しやられ米の収穫はほとんどなく、『浦部さんちは珍しいもの作ってる』と皮肉を言われたこともある。

現在はコシヒカリのほかに、健康食として人気の黒米、赤米などを作っている。浦部修さんは兼業農家。実は江東区に勤める公務員で現在も都内まで通勤している。奥さんの真弓さんとは中央大学の同級生で卒業後ともに江東区で働いた。しかし真弓さんはベーチエツト病という難病にかかり、失明する寸前までいき、やむなく退職。修さんの実家の藤岡に家族で移り住むようになった。

役所から帰宅後徹夜で除草し、通勤電車で寝る日々が続く

修さんは農家の長男。しかし農業では食、べていけないと公務員の道を選んだ。藤岡にもどり両親が農業を続けていたこと、真弓さんが都内での生活で健康のため自然食品店をよく利用していたことも

あり、どうせなら自分たちで食べる米、野菜はすべて自分たちで調達し、無農薬有機栽培で作ることにした。真弓さんは農業に縁がなかったのに、環境と食生活が変わり、毎日田んぼに行っているうちに、すっかり健康を取り戻してしまっただ。

浦部夫妻をさらに農業に深くのめりこませたのは、10年前から栽培し始めたインディカ種の黒米だ。黒米は抗酸化力がありガンや老化を抑える働きがあるといわれ、健康食品として人気がある。

この黒米を作るうちに分けてほしいという人が口コミで広がり、そのうちに普通の米もということになり、米作りは本格的なものになった。

しかし除草剤も農薬も使わないため、雑草の処理は大変なもので、区役所から戻りキャップライトを付けて徹夜で除草し、そのまま通動することもあった。

現在は紙マルチといって再生紙のロー

稲刈りでコシヒカリにかけてある鳥よけネットを外す。スズメは浦部さんの米が収穫が多く自然豊かと知ってか、ほかの田んぼを見向きもせず集まる。

たわわに実ったインディカ種の黒米。真弓さんが東京・湯島天神の露天で見つけ10年がかりで育てたもの。中国から戦中持ち込まれたものと推測される。



家の裏にある倉庫に備え付けられた米の乾燥機。このほかに米を保存するための保冷庫などの設備も整えてある。



右中央が修さん。来訪者を迎える食事会もたびたび。黒米を炊きこんだご飯はなかでも人気。甘味もこくも抜群だ。



ルを機械で田に敷き、その上から苗を植えていく方法を用いる。紙で雑草の芽吹きが押さえられ、紙は4週間ほどで土に還元されるのである。

肥料も化学肥料は使用しない。埼玉県の知り合いから分けてもらった牛糞を寝かせて熟成させて使用するほか、糠、魚粉、油粕、貝化石、粉灰、EM菌で発酵させるボカシ肥料というものを作り、土地を肥沃にしている。

病気対策は木酢やEMの溶液を噴霧するなどして化学農薬は用いない。まさに手間暇と愛情をかけて育てられるのだ。



浦部さんの家に入ると出荷前の米がぎっしりと山積みになっていた。すべて買い取り先が決まっているものだ。